

（午前9時30分 開議）

○議長（中本正人君）おはようございます。
ただ今の出席議員数は20人で全員であります。

○議長（中本正人君）これより本日の会議を開きます。

この際、報告いたします。市長から平成27年12月4日付、橋総第442号をもって追加議案1件が送付されております。議案はお手元に配付いたしております。これを今会期中にご審議願うことといたします。

以上で報告を終わります。

日程第1 会議録署名議員の指名

○議長（中本正人君）これより日程に入り、日程第1 会議録署名議員の指名を行います。

本日の会議録署名議員は、会議規則第88条の規定により、議長において1番 松浦君、5番 坂口君の2人を指名いたします。

日程第2 一般質問

○議長（中本正人君）日程第2 一般質問を行います。

今回の一般質問の通告者は16人です。質問は会議規則第62条の規定により、別紙の順序により発言を許します。

順番1、9番 楠本君。

〔9番（楠本知子君）登壇〕

○9番（楠本知子君）皆さん、おはようございます。

12月一般質問初日ということで、初日のトップバッターというのは、任期4年中ありまして1回回ってくるかけえへんかという感じ

です。緊張の上に緊張をしておりますけど、三日間よろしくお願いを申し上げます。

ただ今、議長のお許しをいただきましたので、通告に従いまして一般質問をさせていただきます。

1項目めは、ぶっくん通帳の推進とビブリオバトル中高生大会の観戦について、ということでお伺いいたします。

2015年秋の読書週間は、全国読書週間として例年どおり10月27日から11月9日までの2週間でありました。最近あまり本を読んでいなかった方も、期間中にはぜひ読書してみてください。子どもがいらっしゃるご家庭なら、読み聞かせをしてあげてくださいねということでございます。市民の皆さま、いかがお過ごしでしたでしょうか。

さて、橋本市図書館事業として行われております、誰もが読書に親しめる環境事業の推進があります。平成26年度末、教育委員会事務点検及び評価報告書におきまして、ぶっくん通帳の周知と活用に努めること、また、ビブリオバトルの中高生大会の継続実施を計画するということが課題と対応のところで掲げられておりました。今年度の取り組みがどのようにされたのかということと、また、今後、積極的な取り組みをしていただきたいということで、今回質問させていただきました。

①橋本市のぶっくん通帳は、子どもを対象とした、図書館手づくりの読書の記録帳です。ここには書名を書くのではなく、本のバーコードと本の値段を記入することになっております。50万円たまると、子どもに記念品、貯金箱だと思いますが、を贈っておられます。この通帳、いつから始めて、どれくらいの子どもの活用されているのか、まずお伺いいたし

ます。

最近では活字離れが指摘をされております中、文部科学省が事業委託する、ICT（情報通信技術）を活用した読書通帳による読書大好き日本一推進事業によりますと、図書館に設置された機器の前に、読書通帳を持って子どもたちが列をつくって並ぶそうでございます。このように、機械化された銀行の通帳のような読書通帳をつくっているところがあります。借りた本の履歴を残すことによって、子どもたちを中心に読書への意欲を高める効果が期待できます。読書通帳が静かなブームとなって広がっております。今後、改善を含めてのぶっくん通帳の取り組みについて伺います。

②ビブリオバトルとは、知的書評合戦という意味だそうで、具体的にいきますと、五、六名のバトル、発表者がお薦めの本を5分程度紹介し、その後、参加者で質問などして、どの本が一番読みたくなったかを投票してチャンプ本を決めるというゲームです。

今年度の目標は、この中高生大会を今年度も開催をするということが目標とされておりましたので、これが開催できたことは、大きな成果であるということになるかと思うんですが、私は、すばらしい取り組みだと思しますので、今後の広がりを期待してお伺いいたします。

2項目めは、認知症対策の充実についてです。平成25年12月に一般質問させていただきました、2回目となります。

私はこの夏に、「老いてさまよう」平成26年度新聞協会賞、第62回菊池寛賞ダブル受賞シンポジウムというのに参加をさせていただきました。平成24年度の認知症の行方不明者は9,607人となり、死亡を確認された人と同年度末までの未発見者数は570人を超えたそうです。毎日新聞社が、表面化していないさま

ざまな認知症行方不明者の実態を伝えてきた様子を、第一部は、「老いてさまよう」報道現場から見たこと、と題しての対談形式でして、第二部は、認知症800万人時代、認知症の人とその家族をどう守るか、と題してのパネルディスカッションでございました。

大変勉強になって、行ってよかったなという事で帰ってきたんですが、橋本市から、本当に、老いてさまようような人を1人も出してはならないという思いを強くして帰ってまいりました。

橋本市の高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画、さわやか長寿プラン21の27年から29年度版が作成をされました。その中におきましても、重点的な取り組みとして、この認知症について質問をさせていただきます。

①認知症施策推進5カ年計画オレンジプランが出され、今後めざすべきケアは早期事前的な対応に基本を置くとなっています。そこで、橋本市の認知症の現状と今後の予想はどうですか、ということです。

②は、医療や介護の専門職がチームとなって、認知症の人やその家族を訪問して支える初期集中支援チームや、認知症支援推進員を設置することとされておりますが、設置していただけるのかどうかということでお伺いいたします。

③前回、認知症ケアパスの作成を質問させていただきましたが、今年度、橋本版認知症ケアパスを作成していただきました。これをどのように活用されますか。

④認知症サポーターキャラバン事業が自治体や企業などで実施されて、今年で10年を迎えます。29年度までに認知症サポーターやキャラバンメイトを、国のほうでは800万人をめざすということとなっております。本市の現状と目標ということでお伺いをさせていただきます。

以上、1回目の質問といたします。ご答弁のほど、よろしく願いをいたします。

○議長（中本正人君）9番 楠本君の質問項目1、ぶっくん通帳の推進とビブリオバトルの観戦に対する答弁を求めます。

教育長。

〔教育長（小林俊治君）登壇〕

○教育長（小林俊治君）おはようございます。

ただ今のご質問にお答えします。

ぶっくん通帳の推進とビブリオバトル中高生大会の観戦についてお答えします。

まず、一点目の、ぶっくん通帳についてですが、本市図書館では、平成19年近畿公共図書館研修会に参加した職員から、後日の館内勉強会において他館の事例として発表された読書通帳を知ったことに端を発し、本市図書館でも取り組んでみたいと提案があり、館員でどのようなものにするのか検討しました。

まず、読書する楽しさと、後日に形として残る楽しさを味わっていただけることを目的とし、対象は小学生以下としました。通帳ということから、貯金を連想し、本の価格を記録し合計金額を書いていきます。本の値打ちは価格でははかり切れませんが、子どもには、どんどん金額が増えていく楽しさを、また、ご家庭の方にも、図書館について考えていただければと思い、始めました。そして、50万円たまった方には、記念に貯金箱を差し上げています。

平成20年度より始めて、現在まで約40名の小学生にお渡ししました。なお、銀行の通帳のように直接印字ができるなどシステム上で行うためには、数百万円の費用と多大なランニングコストが必要ですので、本市では子ども本人に書いてもらい、図書館職員が手づくりの消しゴム判こを押すという、顔が見えるサービスをしています。

現在使用している通帳は2代目となります

が、残数がわずかになっているため、新年度に向け様式等を検討しているところです。今の通帳は欄が小さいため、書名ではなく図書館の蔵書番号や金額など、数字ばかりの記入です。また、蔵書番号で読んだ本を確認することができる市立図書館の本だけの記録通帳としています。

今後、子どもたちの読書活動を推進し、学校図書館との連携を図るためにも、蔵書にこだわらず子どもが読んだ本を記録でき、読書の振り返りとしてすぐ書名がわかる通帳をめざしたいと思います。

そして、図書館の中だけではなく、学校はもちろん、市広報紙やホームページなどへの積極的なPRに努めます。

次に、二点目の、ビブリオバトル中高生大会の観戦についてお答えします。

図書館では、昨年9月から知的書評合戦、ビブリオバトルを開催しています。ビブリオバトルという競技形式の読書会開催で、良い本に出会える機会づくりを行い、読書を広げたいという願いを持って、ボランティアの方に手伝っていただきながら図書館行事として行っています。

ほぼ2カ月に1回の開催で、先日の11月7日には、7回目のビブリオバトルとして中高生大会を行いました。この大会は、県教育委員会主催、県立図書館主管で、今年度初めて開催される県大会の伊都地方予選を兼ねて行ったものです。

開催にあたっては、伊都地方の教育委員会や校長会に出向いて説明し、協力をお願いしました。当日は、発表者として中学生12名、高校生5名の参加と、観戦者として35名の参加があり、盛り上がった大会となりました。発表した中高生は、お薦めの本の紹介を5分間で感心するほど要領よく発表しました。チャンプ本として選ばれた中学生の部と高校生

の部の代表の生徒は、12月13日に開催される県大会決勝に参加します。

ビブリオバトルを実践している学校は少ない現状ですが、伊都地方図書館教育研究会の依頼を受け、図書館担当の先生方に図書館職員がビブリオバトルの紹介と模擬ビブリオバトルを実施し、先日の中高生大会を開催したことで、各学校へのビブリオバトルについての啓蒙が図られ、関心が高まりました。

ビブリオバトルの認知度については、まだ低いものですが、これからはさらに広報や大会の持ち方の工夫を行い、広めていきたいと考えています。

○議長（中本正人君）9番 楠本君、再質問ありますか。

9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）教育長からご答弁いただきまして、ありがとうございます。

ぶっくん通帳は、私も橋本市図書館で通帳があるということを知らなかったんです。ここ最近知りました。読書通帳というのは、全国的に、読書意欲を高めていくということで広がりつつあるということを知って、橋本市も多分あるのかな、ないのかなというような感じでずっと思ってたんですけど、早くからやっていたというので、すごいなというふうに思っております。

先ほど報告いただいた数は、平成20年度から始まって40名の小学生の方というご報告いただいたので、今、平成27年ですので、40名というのは、やっぱり知られてなかったのかなというふうに思うんですけど、せっかくいことをやっていただいていたのに、もったいないなというような感じをいたします。

多分、聞いてもだめやと思うんですけど、今こういった図書館の中で読書通帳というのが金融通帳みたいにして、図書館の前に機器を導入して、そして読書通帳を入れると、読

んでいる本を印字して出してくるというふうなことをしている自治体もたくさん増えておられるということを知ったんですけど、そういう機器を橋本市も入れるとなれば、かなりのお金がかかるということで、このような機器の導入については、今後お考えはないのかどうかということで、お答えできたら願います。

○議長（中本正人君）教育長。

○教育長（小林俊治君）ただ今のご質問にお答えします。

ぶっくん通帳、現在こういう形式で使われています。欄で見ますと、ほとんど数字が並ぶという形であります。そういう意味で、機械化をしますと、先ほど答弁させていただきましたように、かなりの金額、それから、その後のランニングコスト等を考えますと、職員自身が手づくりといいますか、これをもう少し大きくして、書名等も文字で書けるような形に改善をしていきたいと思っています。それと、市報や図書館報等でぶっくん通帳の啓蒙、啓発により一層努めていきたいと、そのように考えています。

また、今のところ、50万円で記念品というお話ですが、今、図書館で考えていますのは、30万円たまりますと図書館職員の手づくりの記念品、心のこもった記念品をお渡しして継続していただこうと、そういう計画しております。30万円で到達して、50万円でまた記念品がもらえるような継続した取り組みをしていきたいと考えていますので、今のところ、議員おただしの機械導入につきましては、財源、財政上の問題から、個人、職員の手づくりによる、こういう通帳の改善に努めていきたいと、そのように考えています。

○議長（中本正人君）教育次長。

○教育次長（坂本安弘君）先ほど教育長が答弁をさせていただいた40名といいますのは、

50万円たまって、貯金箱を渡した子どもの数でございます。通帳につきましては、年間800冊から900冊出ておりまして、20年から27年の実績として約6,000冊発行させていただいております。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）わかりました。ありがとうございます。

この橋本市の財政難でございますので、お金のかかることを言っても申しわけないんですけど、今後そういった機器を入れても、そんなにお金がかからない方法でやっていただける時代も来るかと思っておりますので、今後ご検討いただけたらと思います。

で、改善策ということで、今、教育長言っていたように、バーコードではなく、読んだ本の題名を書いていただくということと、値段も書くんですね。値段も書いていただくというふうな改善を含めた形で、さらに皆さんにしっかりと周知をしていただいて、読書をしていただく意欲を高めるために、また、こういった通帳を活用していただくということでのご答弁でございましたので、よろしくお願いをしたいと思います。

平成25年度の図書館づくりに要する経費は、教育委員会が出されておられます報告書によりますと約1,900万円、25年度ありました。決算額が。平成26年度は700万円ということでございました。多分、いろんなことが25年度でされたので、26年度は700万円に減額されたと思います。

27年度はどのくらいだったのか、まだちょっとわかりませんが、こういった全体的な形で、図書館づくりの経費の中が、決算見込み額がずっとゼロ円というふうになっているんですけど、かなり手づくりで頑張っているなというのを思うんですけど、こういったこと、つくるとなれば、そ

んなに大きなお金はかかりませんが、いろんなお金がかかってくるかと思っておりますので、こういったあたり、なかなかお金をつけていただくのは厳しいかと思っておりますが、しっかりと図書館事業においても、事業費にも気配りをさせていただきますように要望させていただきたいと思っております。

続いて、②のビブリオバトルにつきまして、私も初めて、ビブリオバトルの中高生大会というのをやっているというのをお聞きして、参加、観戦をさせていただきました。

そこで、今回登壇されていたバトラーなんですけれども、中学生の部では、紀見北中学校、紀見東中学校、古佐田丘中学校の生徒の参加でございました。ということは、ほかの中学校の参加がなかったわけなんですけれども、そのあたりについてはどうしてなのかなというふうにも思ったんですけど、図書館事業からのご発信であって、教育委員会との連携といいますか、出せなかったのか、応募しても出なかったのか、伝わっているのかどうか、そのあたりを含めてお願いをしたいと思います。

○議長（中本正人君）教育長。

○教育長（小林俊治君）図書館として、ビブリオバトルを広めていきたいという気持ちは強くあります。そんな中、今回につきましては、伊都地方の中学校校長会で説明をさせていただきました。ビブリオバトルの参加申し込みということで、お願いをさせていただいております。

市内の中学校につきましては、図書館員が参加依頼に1校1校回らせていただきました。ただ、今回につきましては、議員のお話のとおり、紀見北中学校、紀見東中学校、それから古佐田丘中学校、3校からしか出なかったというのが現状です。今後この大会を契機にしながら、少しずつでも広めていきたいと、そのように考えています。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）そのように進めていただけるといってございますので、ビブリオバトルが全てではございませんで、でも、今の子ども、中高生の中で、読書を勧めていく一つの手段として、こういうのもゲーム感覚で大変おもしろいのかなというふうな感じも受けました。

こういった、ビブリオバトルとかをやるうと思えば、ある意味では学校図書で図書館司書といひますか、そういった方々のお力というのが、すごく指導力というのが要るのかなというふうにも思うんですけど、この司書との関係の中で、さらに、必要性というのは大事じゃないかというふうにも思うんですけど、今、橋本市の司書は常駐じゃなくて、多分回っていただいていると思うんです。全校公平に。公平に回っていただくのも、すごくいいと思うんですけど、それもしばらく慣れて、ある程度落ち着いてこれましたら、そういった司書がいると違うんだよと、司書が常駐をしていらっしやると、中学校でもすごくメリットがあるというふうな一つの取り組みとして、常駐も考えていただけないかなというふうにも思うんですけど、そのあたりについては、ビブリオバトルがどうのこうのということではなくて、今後そういうふうな取り組みも、公平に回るといふのではなくて、常駐を考えて、やっぱり司書がいていただくと違うなというふうな取り組みも考えられないかなというふうにも思うんですけど、そのあたりについて、いかがでしょうか。

○議長（中本正人君）教育長。

○教育長（小林俊治君）今、各小・中学校の図書館司書は2名おります。当然、現在22校の小・中学校がございますので、その22校を2名が回るといふ形になっています。来年度、できましたら1名増員していただいと

気持ちでおります。そういう形で、すぐには全ての学校常駐というわけにはいきませんで、年度を重ねるごとに図書館司書が増えていくというふうな要望を出していきたいなと思っております。

それと、図書館と学校図書とのつなぎということも、連携ということも大事にしておりまして、来年度、図書館と学校司書との間での連携を強めるために、図書館での作業も含めながら、図書館での手法を学校図書に持っていってもらうために、図書館にも学校図書の方が、例えば週1回なり、こちらでやって、こちらの本とか手法を学校へ持っていただくというふうな形をとっていきたいなということで、今、図書館とも協議をしております。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）橋本市の図書館は教育文化会館の5階にありまして、皆さんから、どこにあるのという感じで、なかなかわかりにくいというふうにも言われますが、図書館は本当にすばらしい、小さいけどすばらしい活動をされておりますと私は思っております。また、先ほど教育長言われましたように、図書館事業が進めておられるいろんな事業と連携をしながら進めていただきたいなというのを、強く要望させていただきたいと思ひます。

以上で、1番終わります。2番目をお願いいたします。

○議長（中本正人君）次に、質問項目2、認知症対策に対する答弁を求めます。

健康福祉部長。

〔健康福祉部長（石橋章弘君）登壇〕

○健康福祉部長（石橋章弘君）まず、本市の認知症の高齢者の方の現状と今後の予想についてお答えします。

本市における認知症高齢者数ですが、平成27年11月1日時点の要介護認定医師意見書デ

一タをもとに、認知症高齢者の日常生活自立度が2以上、いわゆる日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意すれば自立できる状態以上の高齢者数を集計したところ、2,483名となっています。この集計には、介護認定申請を行っていない認知症高齢者は含まれていません。

そこで、国の認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）で出された認知症の高齢者の将来推計をもとに推計したところ、本市の65歳以上の認知症有病者数は、平成27年10月末時点では約3,000人、平成32年では約3,600人、平成37年では約4,200人となり、10年後には高齢者の約5人に1人が認知症を有することとなります。

また、橋本市地域包括支援センターの総合相談においても、認知症に関する相談は年々増加傾向にあり、今年度は月平均20件の相談を受けています。相談者は親族や近所の方、本人、介護事業所、民生委員等で、近所のひとり暮らしの方が心配、デイサービスに行ってほしいが本人が嫌がる等、相談はさまざまです。

次に、認知症初期集中支援チーム、認知症地域支援推進員の配置についてお答えします。

これらは認知症施策推進事業として、介護保険法改正により、平成27年4月から地域支援事業の包括的支援事業に位置付けられました。

認知症初期集中支援チームは、認知症の人やそのご家族に早期にかかわるために、市町村が地域包括支援センターなどに設置し、早期診断・早期対応に向けた支援体制を構築することを目的としています。

本市では、地域包括支援センターの保健師・社会福祉士・主任介護支援専門員が、既に必要とされる研修を受講しており、認知症

サポート医の確保もできていますので、本年度中に、本市地域包括支援センター内に認知症初期集中支援チームを配置します。

認知症地域支援推進員は、認知症の人に対して、その方の状態に応じた適切なサービスが提供されるように、認知症の人をサポートする関係者の連携を図ること、地域の中に認知症の人とその家族を支援する相談・支援体制の構築を図ることを目的としています。

本市では、現在、地域包括支援センターに推進員2名を配置しており、これまでに認知症の人やその家族への相談・支援並びに認知症ガイドブック（ケアパス）の作成・普及など、認知症施策の推進に携わっています。

今年度も、地域包括支援センターの職員1名が研修の受講を予定しており、認知症施策の体制の強化を図る予定です。

次に、橋本版認知症ケアパスの活用方法についてお答えします。これまでに橋本版認知症ガイドブック（ケアパス）550冊を印刷し、認知症の人やそのご家族との相談の場面で対応方法などを説明したり、市内の各医療機関・居宅介護支援事業所への配布、介護者交流会や介護技術講習会、認知症サポーター養成講座などで参加者の方々にお渡しし、認知症への理解と正しい対応方法などの普及啓発を図るために活用しています。

今後、さらに広く市民の皆さまに認知症について理解していただくために、認知症ガイドブック（ケアパス）の概要を市ホームページにアップするなど、活用方法を検討しているところです。

次に、認知症サポーターキャラバン事業についてですが、この事業は、新オレンジプランの七つの柱の一つとして、認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進を図るための具体的な事業です。

本市では、平成20年度から認知症サポータ

一養成講座を開催し、平成27年9月末時点で開催回数は63回、認知症サポーターの人数は2,028人となっています。

本市主催の養成講座は、学校やボランティア団体、老人クラブ、郵便局、その他金融機関や交通機関等の事業所で開催しています。内訳は、小学校は4校7回、高校は1校1回、市内事業所延べ18箇所15回となります。また、活動のPRを図るために、認知症サポーターがいる事業所に、目印となるステッカーを張ってもらう準備を進めています。

今後の目標としては、認知症サポーター3,500人をめざして、広く市民や市内事業所、学校等に協力を呼びかけ、認知症の人と家族への対応者である認知症サポーターを養成し、認知症になっても安心して暮らせる橋本市となるように取り組みを推進していきたいと考えています。

○議長（中本正人君）9番 楠本君、再質問ありますか。

9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）健康福祉部長よりご答弁いただきまして、ありがとうございます。詳しく答弁していただきましたので、あれなんですけど、まず、1番目、今後の予想ということで、やはり、かなりの人数の方が、高齢者になると認知症をあわせてなられるということで、5人に1人が認知症というような時代がやってくるということがございますので、これまで以上に早期に発見をしていくという、予防に力を入れていくということが大事になるのかなということで、簡単に認知症かなということをチェックできるような、気軽にできるようなシステムとか機器とかを導入されている自治体も結構多いんですけども、そういうお考えは橋本市はないかどうか、まずお伺いします。

○議長（中本正人君）健康福祉部長。

○健康福祉部長（石橋章弘君）おたのしみとお聞きいただき、まず予防、それから早期発見、早期対応というふうが続いていくわけでございます。現時点、後段ご質問にありまして、認知症ガイドブック（ケアパス）というのを作成してございます。その中で、認知症の基礎知識等々から始まりまして、Q&A等々がございます。また、予防というふうな概念も含めまして、認知症の予防教室等々を開催しておるという取り組みがございます。

現時点、そういうふうな機器等を導入してということまでは、ちょっと計画は至っておりません。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）わかりました。

それでは、2番目の初期集中支援チームにつきましては、本年度中につくっていただけるということ、すごいなと。初期集中支援チームというのは、専門的な方がいらっやらないと、なかなかこんなチーム、橋本市でできるのかなと私自身は思ってたんですけど、していただけるということで、認知症対策には大いに役に立つチームができるということで、期待させていただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

3番目の、橋本版の認知症ケアパスというのも、早速つくっていただきました。結局、ケアパスということは、橋本市ではガイドブックを作成するということ、本来のケアパスの目的としてされたということでございますが、それもいろんな情報が網羅されております。それを読ませていただきまして、たくさん情報がこのガイドブックの中に入っているというふうに感じさせていただきました。

このガイドブックなんですけど、今のところダウンロードできないんですね。そのあたりで、今後、全てを市民の方にダウンロード

できるようにしていただけるか、また、先ほど言われましたように、概要版でしていただけるのか、そのあたりについて、いつ頃ぐらいからしていただけるのかなということで、ご答弁お願いいたします。

○議長（中本正人君）健康福祉部長。

○健康福祉部長（石橋章弘君）今ご質問の、認知症ガイドブック（ケアパス）でございますけれども、基本的には、项目的に基礎知識、どんなものであるか、あるいは、その対応のQ&A、あるいは、認知症の方の気持ち、介護しているご家族の気持ちと、体験談等も載せてございます。あるいは、その取り組みとか相談窓口、介護サービスの紹介、それから、ケアパスの概念図等々に続くわけでございますが、これ、ボリューム的にはかなりございます。今、担当課として考えてございますのは、概要版にして、エッセンスの部分を広くPRしたいというふうに考えてございまして、いまいしお時間をいただきたいと考えております。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）本当に市民の方にとっては大事な情報がありますので、そういった情報を早く、皆さんにわかりやすい形で発信していただきたいなというふうに思いますので、できるだけ早く、よろしく願いをしたいと思います。

それで、次の認知症サポーターにつきましても、橋本市も現状を踏まえて、今後の目標数も3,500人をめざして、しっかりまたサポーターをつくっていくということで言っているところでございますので、よろしく願いしたいと思うんですけど、この認知症の高齢者の方を見守っていく体制づくりということで、いろんなほかの自治体で始められているのが、企業と行政の今やってほしいニーズをマッチングさせて、そして、それもお金のかからな

い方法で、こういった高齢者の見守り事業をやっていくというふうなことをやられているところがございます。

企業といいますと、橋本市では、この認知症サポーター養成講座をしていただいているところが、南都銀行であったりとか、南海林間バスであったりとか、シルバー人材センターなどにも、企業としてサポーター養成講座をしていただいておりますが、さらに郵便局であったりとか、さらなる金融機関、また、コンビニエンスストアの店長であったりとか、そういった皆さま方に養成講座をしていただいて、認知症サポーターになっていただいて、そして、行政のそういった見守り体制をしていきたいという要請とマッチングさせて協定を結んでいくというふうな形で、高齢者の方の認知症の徘徊などの見守り活動に、あまりお金をかけないでやっていくというような連携が大事になってくるのではないかなと思うんですけれども、そのあたりの取り組みについて、今後の取り組みについてお聞きさせていただきます。

○議長（中本正人君）健康福祉部長。

○健康福祉部長（石橋章弘君）このサポーター養成講座でございますが、平成27年度におきましては、市内の郵便局で実施いたしました。今後、議員今おただしの趣旨、十分そのとおりだと思いますので、そういうふうな協力していただける企業等々に広げてまいりたいというふうに考えます。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）よろしく願いいたします。

そしたら、先ほど部長言われました、ステッカーを張っていただく企業も進めていくというふうなことを言っていたんですけど、それはいつ頃から始めていただけるのでしょうか。

○議長（中本正人君）健康福祉部長。

○健康福祉部長（石橋章弘君）これにつきましては、現在準備しておりますので、準備が整い次第、本年度中には実施いたします。

○議長（中本正人君）9番 楠本君。

○9番（楠本知子君）ありがとうございます。認知症対策ということで今回質問させていただきました。いろいろ、いっぺんに何もかもいくことは大変難しいとは思いますが、少し

でも前へ進めていただけますよう、よろしく
お願いいたします。

以上で質問を終わらせていただきます。

○議長（中本正人君）9番 楠本君の一般質問は終わりました。

この際、10時30分まで休憩いたします。

（午前10時15分 休憩）